

たいじょうほうしん
帯状疱疹

銀子ぎんこが皆から一目置かれていたのは、その性格が穏やかなのせいもある。おっとりした物言いもそうであるけれど、白黒の極端に走らない物腰が人を牽き付けた。一部のせつかちさんからは、ただの優柔不断なんでしょう、と決め付けられそうであるが。命名は彼女が産まれると入れ違いのように亡くなった祖父(母方)によるものだったらしい。銀子の実母も産後の肥立ちの悪さがたつて四歳の時に亡くなっている。であるから実母の記憶は一切無い。どうして金じゃあなくて銀なの?と聞く当時、小学生の銀子に、銀子の父親は爺ちゃんは金色より銀色の方が好きだったからと父親は教えてくれた。それに金だとキンとも読めるしカネとも読めるから悪戯かたねっ子からお金とお金とイジワルを言われそうだから銀にしたという。訳の分からないような説明だね、と大人になってから銀子はそう思っている。それでも、ぎんちゃん、ぎんちゃんとか、お銀ちゃん、お銀ちゃんと皆から気安く呼ばれるのが本人には幾らか得意であった。再婚である両親や五歳離れた妹との家族間、時には学校のクラスでの些細な対立が生じても彼女がムキにならないことが皆に穏やかな印象を与える。それはひとつの仮面であったが。ただ、生まれつき視力が悪かった。早くからメガネを掛けるのも悩みで鼻が低いのでメガネがずり落ちることが銀子を憂鬱にした。五十年前の小学校ではメガネの生徒はわずかである。普段の生活ではメガネを外しているので周囲がぼうーとしか見えないらしい。そんなことから随分トンチンカンの行いがあったが笑い話で終わることが度々だった。中、高生になれば多感な思春期で同級生や知り合いに遭遇して判らなければ非難や陰口が飛び交うであろうが銀子においてはそうした悪口が不思議に生まれない、偽装の性格が功を奏していた。・・銀子には子供の頃から手癖が悪い性癖があった。異母姉妹である妹の持ち物を無断で借用したり失敬することがしばしばで紛争が絶えなかった。食堂を営む両親の店の売り上げ箱から小銭を掠めるのは日常茶飯事だった。再婚の両親はそんな銀子に心を痛めたが原因は掴めない。お銀がまた持つていったな!父親はその度に目を三角にする、養母は自分のことのように狼狽する、銀子に対する疑心暗鬼が家族中に生まれる所以であった。器量も悪い上に誰にも話せないような手癖の悪さでは到底、就職などは無理である。食堂を手伝わせて両親で監視下に置いているうちに思わぬ朗報が飛び込んで来た。店に出入りする信用金庫の職員の青年が両親を通して求婚してきたのである。信用金庫とは長い取引があった。店を手伝っていた銀子は、そのモソモソした新入りの青年を知らないわけではなかったが自分の不細工な顔付きが災いして激しい恋愛などとはトンと縁がなかったので親の言われるままに結婚に同意する。高校まで一貫して女子校だったせいで男性との交わりが少ない理由もある。同級生にに誘われて一時、宝塚歌劇団にお熱を上げたこともあるが、さして青春時代の甘い思い出などはからつきし無い。小学生

時代に書道を強制されたが墨をするとメガネを装着する時と同じくらい背筋が寒くなるような悪寒が走った。両親は、こんな彼女に手を焼いて様々な興味を持たせようとしたが何の効果も無かった。じゃあ、銀子の楽しみは何か?・・・読書である。彼女はそれを実に巧みに隠し続けた。本来、本好きの趣味などは高尚な部類に入るはずなのに銀子が何ゆえにおおっぴらにしなかったか?それは本に夢中になっている自分の姿が妙に隠微とか背徳に思えたからだ。中、高生時代の放課後や卒業してからの店の休日、近くの図書館へ出向いて日永、本に熱中している自分を想像すると妙に恐ろしい気持が兆す。両親が店でテキパキと立ち働く姿と比較して何と罪悪であろうかという自省である。だが、好きな本に嵌まった時の高揚感は何ごとにも替えがたいトキメキがあった。次、次とページをめくっていく胸の高まりやスリル、それは何ごとにも替えられない心の燃焼であった。特に銀子の銀の文字が使われている題名には興味を引かれたものだ。銀河鉄道の夜(宮沢賢治)や銀の匙(中勘助)などである。しかし、彼女は結婚を境にして夢中になっていた本へののめり込みも沙汰が止んだ。子育てに追われたからである。信用金庫の夫は家では無口で無愛想、定時に出て定時に帰って来る。残業は週五日のうち二日ぐらいである。休日はのんびんだらりん、パチンコが唯一の趣味だった。大学出というのに何とも冴えない人物である。銀子が始めての女性という今どき珍しい堅物であった。当然、銀子の方も初めての男性であるが。それでも夫婦は睦まじく暮らした。たまには店を手伝うこともあったが二人の男の子供に恵まれてからは父母の店の近くのマンションで家庭生活を護っていれば良かった。夫の勤務は都内に限られていたから転勤のため引越すする必要は無い。しかし、平穏な生活にも突然、不幸が訪れる。父親が脳溢血で呆気なき身罷ったのである。タバコと酒、過労が重なったことが原因らしい。養母は食堂を維持する気持が失せて店を閉じる。その母親も後を追うように十カ月後にクモ膜下出血で亡くなった。まだ五十代の若さだ。長い介護生活を送らないだけ銀子と妹は内心ホッと安堵したけれど心の空白は埋めようが無いものだった。妹は子供の頃からデザイナーになりたいという夢を大きく持っていた。結婚もせずにニューヨークで一人暮らしである。銀子は養母の形見分けを手にしながら二人の性格の違いを秘かに思い出す。妹は勝気だった。幼い頃から可愛い、可愛い、美人になるね!と誉めそやされている。銀子とは対照的な派手な妹、姉妹間にわだかまる嫉妬と軽い反発、それと顔さえ知らない実母への憧れ、それらがこんがらがっておぞましい記憶が甦る・・・店の売り上げ箱からお金を黙って掠め盗ったこと、両親が経営する店であったからまだ良い方であるが、小学四年生の時、本屋さんから苦情が持ち込まれた。お宅のお譲ちゃんがお金を払わないで本を持って行ってしまったというものだ。両親は驚いた。○○○食堂の娘に盗み癖があるなどと噂になったらどうしよう、母親は胸を痛めた。商店街の仲間だったから穩便に後始末したものの両親は銀子へ限りない不安を感じたのだ。鬼っ子?どうして

そんな癖が生まれたのだろう、大丈夫かな？・・・銀子自身がそれらの短所を強く自覚するようになったのは中学校へ進学してからである。中学一年生で遅い生理が始まった途端、ふっと、妙な感情に囚われた。何をしても愉快でない、楽しさが心に沸いて来ない、陽気な感情が生まれてこない、サークル活動に誘われても直ぐ飽きてしまふ、一人でいると不安な気持が兆して来る、女になることへの不安、子供生むことへの恐れ、病気ではないか、生理病？などと自問自答したことさえあった。そんな定まらない気持がドキドキする愉悦？へつながらるのだった。堂々と小遣いを貰えばいいのに敢えて黙ってお金を掠める、手癖の悪さを自覚しながら、その愉悦に溺れていった。そうしてこつそりと好きな本を買ったのである。学校の図書館でも一冊二冊と銀子は黙って鞆へ入れた・・・

結婚の三十五年間はあつという間に過ぎた。子供達の進学、受験に夫共々振り回されながら兎に角、それなりに頑張つて来た。幸いにも銀子の悪癖は封印された・・・ところが定年間際に近い夫が五十八歳で倒れた。父親や母親と同じ類の脳の病気である。脳に恨まれたような一家？という気持が否応なしに襲つて来た。夫は高血圧から来た脳軟化症、下半身マヒの状態が三年続く。銀子はシモの世話に明け暮れながら肺炎を併発した夫を見送った。シモの世話は大変だった。部屋中に漂う異臭に往生して終わりの頃は早く逝つてくれればいいと秘かに考えることがしばしばだった。あわただしく葬儀を済ませたあと、がらんとしたマンションの部屋に銀子は一人取り残された。たまにやつて来る二人の倅と孫たちが彼女の唯一の慰安ではあつたが、それも、そう大した気休めにはならなかった。還暦を迎えたと云つても銀子の心持ちは若い。ただ、毎日が退屈で遣り切れないのである。お金には不自由しないが夫を失つて始めて心の空白が埋めようがない事実であることも分かった。大して愛情も感じない夫婦だったが突然の死は銀子を混乱に陥らせた。妹とも疎遠になっていた。人は孤独であるという切なさである。もう昔のように読書にのめり込む気力も失っている。心が揺さぶられるような何かが欲しかった。

そんな時だった。銀子がホームセンターで万引きを働いたという不祥事を起こしたのは・・・四、五日前から太股の裏側へ出た紅いぼつぼつの発疹が痒くて、近くの総合病院の皮膚科を受診していた。虫指され？家ダニ？と様々に懸念していた女医さんから、ひよつとしたら帯状疱疹かもしれないと告げられてことである。帯状疱疹？銀子はその日、家に帰ってから直ぐに家に備え付けの医学事典で調べた。帯状疱疹、水疱瘡の名残りという記述が目飛び込んで来た。さらには様々な解説記事が載っている。子供の頃の水疱瘡が年を取ると急に出てくることがあるという。ストレスから来るものや疲労が重なって出る場合もあるらしい、二、三週間の治療は必要で他人へ感染することは無しと書き記されていた。五日ぶんごとの塗り薬と服用薬を貰ってひとまず安心しながら自宅へ帰ると途中で、新しくオープンしたホームセンターが

目に入る。気晴らしに足を踏み入れてみると、あらゆる生活用品が売られている。ミニデパートと呼んで不思議でない品揃えである。銀子は一通りに店内を一巡、夕方だったせいで人が溢れている。ワゴン車を押して女達がウロウロと狭い通路を行き交っている。化粧品コーナーで銀子は何気なく立ち止まって一つ一つを眺め始める。国内のブランド品も取り揃えてあった。値段がデパートに比べると確かに安い。化粧水にしてもクリームにしても香水にしても。銀子は二、三点の品物を無意識に手提げに入れた。まるでただで試作品を貰うような感覚だった。手提げは生前、夫が買ってくれたイタリア製のブランドだ。近くの病院へ出かけるのにブランド物でもないと思うだろうが彼女にはたとえ何処の外出であろうが、手提げは片身放さない必需品だった。財布、銀行通帳、診察券、家の鍵、手鏡、携帯等が入っている。財布には何時も三万円は入れていた。

もしもし・・・、すみません・・・バックの中を拝見させて下さいますか。五代とおぼしき中年の男が背後から銀子に声を掛けてきた。店先を出たばかりのところだった。銀子は黙って振り返る・・・あのー、すみません・・・バックの中を・・・。男は小声で同じセリフを言い放った。どこにでも居るような額の禿げ上がった中年男だ。しかも鼻毛までが見える不潔な男性。何でしょうか・・・。銀子は立ち止まって男を見詰める。いや、ちよつと、バックの中を見せてもらえばいいんです・・・。もしかして、会計、済ませていませんよねー・・・。男の眼が急に険しくなった。ああ、そうだ、先ほどの化粧品をうっかりレジを通さずに来てしまった、銀子は一瞬思った。もう一度、店へ戻ってくれますか・・・。ちよつと、奥の方へ・・・。男は銀子のバックへ手を添えながら彼女を誘導する。まずいことになったわ、と口の中で呟く。そんな積りじゃあ無かったのに・・・。困ったわ・・・。困ったわ・・・。急に心が波打ち始める。銀子は店の一番奥まで連れて行かれた。狭いごたごたした部屋にはすでに若い女性が待機していた。さつき店に入ると男が携帯で何か話していたけれど・・・。わたしはこの店の保安係りです、中年男が自らを名乗った。あなたは・・・。レジを通しませんでしたね・・・。それで確認のためにこちらへ来て貰ったので・・・。主任の立会いの上でバッグを開けて貰います・・・。女性店員というのはどうやらこの店の主任らしい、中年男が手の平を上にしてそう言った。銀子のブランドバッグが開けられる。中のものを全部取り出される。一万円札が三枚と千円札が六枚出てくる。こういう手口でやるのが多いんだ！・・・。中年男の呟きが銀子の耳に聞こえて来た。ほーら、これとこれがそうだろう・・・。あんたはお金を払っていない、万引きしたんだよ・・・。男の言葉遣いがぞんざいになってくる。主任店員と呼ばれた女は一部始終を冷たく眺めている。住所と名前をここへ書いて！・・・。誰か・・・。引受人がいるかい！・・・。次々の言葉がチクチクと彼女に浴びせられる。銀子は木椅子に座らされて取調べを受けてい

る。どうして・・・バッグへ入れてしまったのだろうか？どうして・・・レジを通らなかつたのだろうか？・・・引受人がいないと警察へ引き渡すからな！・・・おばさん・・・亭主か子供は・・・いないのかい！・・・銀子の頭の上で保安係り中年男が嵩に掛かつて攻め立てる。こんな・・・金を持って・・・やるんだから・・・囮に見せかけて・・・常習犯だろう・・・何にも言わないなら、警察を呼ぼう・・・そうね、それがいいわね、警察で調べてもらいましょう・・・主任と呼ばれた女性店員は銀子と保安係りへ向かって勝ち誇ったように言った。目の細い、イジワルそんな感じがした。自転車で駆けつけた若い警察官と共に近くの交番へ連行される。途中で人がジロジロと眺める、何だかとても大袈裟になってしまったのだ。

ここへ住所、氏名、電話、成年月日、家族構成、を書き込んで・・・奥の部屋で二人の巡査に囲まれた銀子は調書を取られる。困ったわ・・・困ったわ・・・嫁に迎えに来てもらう訳にはいかないし・・・次男のあの子しか居ないわ・・・携帯で電話したが電話に出ない。困ったわ・・・困ったわ・・・地元信用組合に勤務している次男・・・折り返し机に出された銀子の携帯電話が鳴った。何？・・・何なの？・・・次男の声だ。あのねえー・・・ちよつとわたしのところへ来てくれない！・・・今、交番に居るのよ・・・

どうしたの？・・・事件でもあったのかい？・・・そうじゃあないの・・・お母さん、万引き犯にされたのよ・・・ええっ！・・・マジかい！・・・冗談だろうか？・・・いえ、本当なのよ・・・誰か引受人が居ないと家へ帰れないのよ・・・頼むわ・・・〇〇子さんには絶対、内緒でね・・・次男は場所を聞いてからタクシーで来ると言った。あの子にも迷惑かける、銀子は急に頭が痛くなって机にうつ伏せている。おばさん・・・大丈夫かい？一人の警官が声を掛けてくれた。おばさん・・・おばさん・・・何度、屈辱的な呼び方をされるのだろうか・・・おつかさん・・・どうしたんだい・・・次男の声である。こんな立派なお子さんが居られるのに・・・お母さんはきつと魔が指したのでしょうか・・・初犯のようですから今回は調書だけの取調べで終わります、息子さんからも、しつかり注意をして下さい・・・癖になると厄介ですからね・・・あなたの仕事にも影響を及ぼしますよ・・・年配の方の警官が脅しのような言葉を綴っている。息子が頭を下げているのが銀子の目に入る。次男が銀子の腕を掴んで椅子から立ち上がらせた。バッグだけは、しつかりと抱える銀子、交番から出る彼女は全身が牛の動作のようにはろくさい・・・屈辱にまみれた次男が怒ったようにタクシーを呼び止めた。自宅までの短い距離に運転手は明らかに不快な表情を示す。次男が卑屈なお辞儀をして降りる。居間に戻って二人は無言である。どうしたんだい？次男がイライラする様子が手に取るように分かった。銀子は何も言わずに黙っている。こんなことが度々になると、オレの方も困るからな！しつかりしてよ！・・・息子の言い分が分からないわけではない、ごめん、ごめん、銀子は小さく呟くだけだった。言葉

少なく次男はあわただしく帰って行った。ぽつんと取り残された銀子、ボーツとする彼女に太股の内側の皮膚部分に痒みが走る、帯状疱疹のところだ。皮膚科の医師が言った言葉が浮んで来る。この皮膚病は、小さい頃、水疱瘡ほうそうをやっていた人が、その菌の根が残っていて五十代六十代になって突然、発症することがあるんですよ、人には移りませんし心配することはないのですが、二、三週間は痛みや腫れが続くかも知れませんね、と。赤く縁取りになった球状の湿疹が都合十ばかり白い内側の太股をおか冒している。クビや顔周辺でないのが不幸中の幸いでしたよ！表へ出られませんか、でも〇〇〇さんは凄く色白ですね・・・女史医師は太股へ目をやりながら笑った。

そうだわ、わたしの今度のことは、帯状疱疹と同じ・・・なんだわ・・・小さい頃の水疱瘡の痕跡、わたしを蝕んだ例の得体の知れない盗み癖がひよつこりと年と共に甦ったんだわ・・・どうしようもない・・・どうしようもない病気だわ・・・誰のせいでもない、小さい頃の病気が再発したんだから・・・だから・・・どうしようもないことになるの・・・交番でそう言えばよかった・・・謹厳実直な目付きをした年配の警官の前で、下着の裾を思いつき捲り上げて、原因は帯状疱疹です、雅子さん（皇太子妃）だって同じ病気になったんですよ、と叫ぶべきだった、でも、そんなことが理由として通用するかしら？・・・意味不明？あんた、頭が可笑しいんじゃない、なんて若い警官に言われそう・・・

銀子は頻りに自分へ向けて問答を繰り返していた。